

宣教師軍師官兵衛

宣教師のみた黒田孝高④

天正17年(1589)、黒田官兵衛は急に家督を長政に譲り、自らは隠居しました(『黒田家譜』)。その理由は、豊臣秀吉が官兵衛の才能に恐懼していることに気づいたからとも言われています(『常山紀談』)、『黒田家譜』では「病者」になったからとしています。

その後、フロイスによれば、下記のように文禄2年(1593)、官兵衛は出家し如水と名乗りました。一方、金子堅太郎氏は長政に家督を譲った際に出家して如水と号した(『黒田如水伝』博文館、1916)としています。フロイスの記述とは、如水を名乗る時期もだいぶ異なっています。

彼らは(朝鮮在陣の武将)、官兵衛殿を、他の重臣とともに関白の許に派遣してその意向を伝えることにした。・・・この回答と意見は、大いに関白の不興を買った。・・・彼らを卑怯者と呼んだ。なおまた官兵衛に対して激昂し、彼を引見しようとせず、その封禄と屋敷を没収した。

官兵衛は剃髪し、予の権力、武勲、領地、および多年にわたって戦争で獲得した功績、それらすべては今や水泡が消えるように去って行ったと言いながら、如水、すなわち水の如し、と自ら名乗った。(【5】273)

朝鮮出兵の際、官兵衛は石田三成らに粗忽な態度をとったことを秀吉に報告され、慌てた官兵衛は急ぎ帰国しましたが、秀吉に無断で戦線を離脱したことをきつく叱責されました(小和田哲男『黒田如水』ミネルヴァ書房、2012)。上記のフロイスの記事では、ほかの武将たちと帰国したことになっています。文禄2年頃、日本軍は明軍の参戦で後退を続けていました。そこで武将たちは、まずは釜山附近の海岸部に築城してから全羅道の攻略を進めることとし、その許可を求めるために帰国したのですが、秀吉の戦略とは相容れず(まずは全羅道の占領ありき)、かえって官兵衛は秀吉の怒りを買い、「封禄と屋敷を没収」されてしまい、資産・名誉・権力などが水泡に帰し、如水と号したというのです。

秀吉の官兵衛に対する不信感は、このときピークに達した感がありますが、それ以前から何らかの理由で不信感が募ってきていたのではないのでしょうか。以下は、九州征伐の際、天正15年(1587)の博多での出来事を記しています。

彼(官兵衛)は関白の軍勢に参加したすべての者より勝利を博したので、その偉大な業績、ならびに出費のため、関白から報いを受けるために来たのであった。彼にはすでに豊前の国が約束されていた。・・・「汝はそれに価せぬ。国を統治する能力もない。あまつさえ汝はキリシタンになっただけでは満足せず、諸国の君侯や他の貴人たちに対して、キリシタンの教えを聞いて洗礼を受け・・・」と言い、さらに彼に対して幾多の罵詈雑言を浴びせかけた。(【4】246)

この直前に秀吉は、突如バテレン追放令を出しています。この法令は、宣教師らの国内での布教を禁止し、国外退去を迫るものでした。これに関連して松田毅一氏は、フィリピン総督ドン・フランシスコ・テーリョへの返書を引いて「・・・聞くとところによれば貴国は布教をもって謀略的に外国を征服しようと

欲しているということだが、・・・卿らは、そのような手段をもってその地の旧主を退けて新たな君主となったように、予に背き、当国を支配せんと企てたのであろう。」と、秀吉の不信感を紹介しています(口語訳；『南蛮のバテレン』朝文社、1990再刊)。秀吉周辺の主だった人々がキリシタンへの処遇急変の意図を認識していたことは、「太閤様は、キリシタン宗門そのものは嫌っておられぬ。イエズス会のバテレンが地位の高い者を信者とし、国を奪うことを案じて追放処分に付されたのだ」との前田玄以の発言から察せられますし(口語訳；松田前掲書)、官兵衛への罵倒にもそのことが表れています。

そもそも官兵衛はフロイスから「改宗の道具」といわれ、九州の半分を治めるまでになったキリシタン大名の多くが官兵衛の勧誘で受洗しているわけですから(「城踏」No.79)、バテレン追放令にはまともに抵触します。秀吉との正面衝突は避けようがありません。

また、「予(官兵衛)はこのたびの戦(九州征伐)で成功したならば、関白がその功績によって一国の主に取り立ててくれることをデウスにおいて期待している。予はその国の住民がすべてキリシタンのみ

から成り立つよう定めており、同国の教会の建言を委ねるために一人の司祭を呼ぶ考えている」(【11】52)との展望を聞くと、官兵衛が宣教師よろしく布教活動をしていると見做されても何ら不思議はありません。秀吉も知行の約束を反故にしたくもなります。それなのに官兵衛は宣教師に依頼されて追放令撤回の説得を試みますが、当然聞き入れられるわけもなく、かえって秀吉の不信感を増幅させるだけになってしまいました。そんな結果になるだろうことは十分予想されるのに、です。

“官兵衛ファン”からすれば、おそらくこうした展開は不満でしょうし、すべては秀吉の性悪のせいにしたくなるころでしょう。天正5年頃より、官兵衛は秀吉と「兄弟のしたしみ」(『黒田家譜』)をなし、共に働いてきたではないか、そんな官兵衛を捨ててしまうのか、と。たしかに、秀吉は当初、官兵衛に弟・秀長同然に思うと書状に認めています(天正5年7月23日付羽柴秀吉書状、「黒田家文書」、その心は、官兵衛はそうでも言えば懐柔できる単純な人間だと見抜いていたともいえます(谷口克広「中川清秀」『豪壮秀吉軍団』学研、1992)。そんな二人の関係にも、天正14年頃から変化が表れてきたようです。結局豊前国のうち6郡を得て12万石の大名となりましたが、上記の秀吉の罵詈雑言に対しては、「だがデウスは、かかる極悪人を罰さずにおかれぬのが常であるから、拙者が思うには、彼はこれ以上長くは生き得ないであろう」(【4】247)と思うところを吐き出したのです(官兵衛が言ったことになっているが、フロイスの弁かも)。

黒田官兵衛には“稀代の軍師”という飾り文句がつき、知略に優れた人物だったとの評価があります(橘川真一「黒田官兵衛・心は水の如し」『姫路城を彩る人たち』神戸新聞総合出版センター、2000)。豊臣秀吉とは「兄弟のしたしみ」の間柄で、その片腕として働いてきました。そんな彼が、どうして秀吉の心中を洞察することができなかったのでしょうか。



太宰府天満宮境内に残る「如水の井戸」